



「遊ぶ」ことの大切さ(後編)



こどものこころの相談室 がじゅまる 臨床心理士 寺崎 真一郎

前回、「こどもが遊ぶこと」の重要性について書きましたが、今回は別の視点から「こどもが遊ぶこと」について考えてみたいと思います。

遊ぶことと、臨床心理学というのは密接に繋がっているところがあり、「遊ぶこと」を治療的に応用しようとした人がアンナ・フロイトやメラニー・クラインという女性の児童分析家の人たちです。この2人は、イギリスで1920、30年代くらいから熱心に、問題行動のあるこどもたちの治療を行っていました。

アンナ・フロイトもメラニー・クラインも、「遊び」というものを通じてこどもとコミュニケーションし、こども自身が内面に抱えているものを理解したり整理したり、発散することで問題行動の解決に尽力していました。

こどもの「こころ」にアプローチする専門家は、こうして「遊び」を通じて関わったりすることが多いのですが、これはあまり一般の方には知られていないように思います。遊びを通じたアプローチをみなさんに知っていただくために、ケースをご紹介します。



ある小学生の男の子がいました。その子は学校で暴れることがあり、隣に座っている友達の教科書をぐちゃぐちゃにしたり、時々頭を打ち付けることがあるので、担任の先生も困ってしまって、私とその子と会うことになりました。

私が彼に話をしようとする、全く視界に入っていないのか、一目散に部屋の隅に置いてあったぬいぐるみを触り始めました。彼は小さなクマの人形を手にとって、他のぬいぐるみの人形たちをなぎ倒す遊びを始めました。その様子を見た私はこの場所が怖くて怖くて仕方ない、自分を強く見せることでそういった不安に立ち向かっているのだろうと思いました。「ここにいきなり連れて来られて、怖かったかな。」と伝えると、彼はパツとその遊びを止めて、私を一瞬見て、また小さなクマの人形が大きな人形をなぎ倒す遊びを続けました。彼も必死に遊び、彼の遊びに圧倒されながら、こっちも必死になってついていきました。

私は彼が遊びを通じて、どんなことを訴えたいのか想像し、関わり続けました。それから何度か彼と会う時間があったのですが、彼はいつも話すことはせず、ぬいぐるみの遊びを繰り返しました。お互いに必死に遊んでいるうちに、「**もしかしたら彼の描く世界と同じことが授業中にでも起きているのではないか**」と気が付きました。

「こんな風に、教室もあなたにとってはとても怖い世界なのかな」と伝えると、ピタッと遊びをやめて、まるで抜け殻になったように、へなへなと座り込みました。彼はおそらく、何らかの事情で教室の中で過ごすことがとても怖い体験につながっていたのでしょう。そのため彼がやっていた行動はおそらく「不安に耐えるために、やっていたことだったのかもしれない」と思いました。



ちょっと微笑ましかったのは、帰り際に私のカバンにクマのぬいぐるみを入れてきたことです。戸惑いながら私が「一緒に帰ろうということ？」と聴くと、初めて彼は声をあげて笑いました。

さて、彼はこの後、教室で落ち着いて行動することが増えました。少なくとも、頭を打ち付けることはなくなったそうです。

こどもにとって「遊ぶこと」は、治療的な意味合いがあるというのは前回お話をしました。今回は、実はこどもの「遊び」の中に、こどもの内面的なものが映し出されていたり、それを使ってコミュニケーションすることもできるということを伝えかけたのです。

臨床心理学の世界では、こういったアプローチを「遊戯療法」とか「プレイセラピー」と言ったりします。子育ての中で、こどもの遊びからこどもが内面に抱えていることを想像したりするのは容易ではないでしょう。

また、忙しい子育てのなかで、こどもと一緒に遊ぶこともままならないというのは事実、あると思います。

私もこどもの遊びから、こどもの内面を読み取って関わったらいいと提案したいわけではありません。ただ、こどもは言葉では説明できないこの世界を、遊びによって表現したりすることができるということ、それは自発的な遊びの中にこそ生まれる可能性があるということ、こどもの世界に耳を傾けてみると、子育ての面白さ、こどもの面白さに触れられるのではと思うのです。



前回の最後に、大人が遊べなくなっているということをお伝えしました。先ほどのこどもが人形をなぎ倒すような遊びをしている場面でも、大人の方が「そんなことやめなさい!」と止めてしまうことが少なくないように思います。

事実、こどもが遊びの中で痛めつけるような遊びに発展した時、それを何度も制止する場面に遭遇することがありました。こどもは遊んでいるんだけど、大人は遊べていない。それには暴力的な行為を、実際の生活の中でやってしまったらどうしようという大人側の不安があるように思います。

少し前の話になりますが、アンパンマンを観ていた親御さんから「アンパンチという暴力で解決するようなアニメを放映するのはいかがなものか」という苦情があがってきたことがありました。作者のやなせたかしさんはこう答えたそうです。「僕らが小さい頃は、チャンバラごっこをやっていた。でもだからと言って、そのことで人を実際に傷つけたりしようと実行したことはなかった」と言い、遊びは遊びとして、こどもは分かっている、アニメはアニメとして分かるようにこどもは成長していくんだと言いたかったのではないかと思います。

振り返って考えてみると、わたしたちが生きる世界というのは、現実と空想の境界線がかなり曖昧になっている、それを楽しむような時代に入ってきているのかもしれない。しかしそれは一方で、空想的な世界を空想的なものとして遊べるようなことが難しくなってきている、とも言えるかもしれません。



今回のテーマは、「遊ぶ」ことの大切さでした。前編・後編の中で、2つのケースをご覧いただきました。

「遊ぶ」こと自体が難しくなっていますが、「遊ぶ」ことには治療的な意味合いがあり、トラウマティックな体験を乗り越える力になること、自分の心を表現する言葉の代わりになることをお伝えしました。

この記事を読んでくださった方が、こどもの「遊び」の中にあるこどもや子育ての面白さに触れることが出来るといいなと思います。

滝上町にも、滝上町こども園内の、子育て支援室(幼児対象:平日9時~12時)など「遊び」を提供する場所がありますので、ぜひご利用ください。

スクールカウンセラー事業として、毎月1回、滝上町内のこども園、小中学校を訪問し、お子さん・親御さんとお話しする時間を設けています。

ご相談を希望される方は、お子さんの通う滝上町内のこども園、小中学校または教育委員会へお問い合わせください。

